

新しい労働の在り方を目指して

—プロセスを進める労働—

馬 田 哲 次

I はじめに

日本で過労死が問題になって久しい。働くのはより多くの所得を得、より豊かになり幸せになるためなのに、働きすぎて死んでしまう。また、国民の大多数が自分の生活を中流だと考え、明日の食べ物にも困るという人は殆どいなくなった。食べるために生きていく時代から、生きるために食べる時代になったと言えよう。所得の大部分が生活必需品に対して支出されるのではなく、奢侈品に支出される割合も多くなってきている。このように一見豊かな社会から過労死の問題が起こったりしている。

また、日本の多くの労働者は、仕事が生きることの全てになっていて、その仕事がなくなったとたん、生きることすら失ってしまうのが現状である。退職後会社組織を抜けると、どのような老後を過ごしていいか分からない。定年退職後、何もすることがなくなって、粗大ゴミとか、濡れ落ち葉とか言われるのは悲しい現実である。人間関係が、会社組織の中での、出世のみを目的とした関係である以上、会社組織を離れてしまえば、そこでの人間関係はなくなってしまふ。昔の部下を家やゴルフに招待してもすっぽかされてしまふ。退職後、生きる目的を失ってしまうと、急速に老

けたり、ボケずにはやっていけない現実がある。ややもすれば、女性が社会に進出する場合にも同じことが言えるが、女性の場合は退職後も新たな希望を見つけやすいのが、男性と違うところである。

このように、一見豊かな社会の中で、過労死の問題や、老人性痴呆症の問題が起こってきている。従って人は何のために働くのか、誰のために働くのか、働くことから何を学び、豊かさをどのような形で自分の体内に組み込んでいくのか、といった問題を考え直すことは今日とても重要な問題である。このような人間の原点にたった問題から考え、そこから新たに経済の問題について考えなければ、今日の社会が抱えている過労死や痴呆症、精神病等の現代病や環境問題等々の問題の真の解決は出来ないように思われる。今日の社会問題が十分解決できていないのは、人間を置き去りにしているからであると思われる。置き去りにしないまでも、現代の経済学は、現実には存在しない人間、つまり合理的な経済人を仮定している。経済は人間の日々の行為によって成り立っているはずなのに、経済学の中に生きた人間は現れてこない。もっともっと生きている現実の人間を中心に据えて議論をしなければいけない。そうしないと、最も大切なことが経済学の中から抜け落ちてしまう。

経済成長ということがよく言われる。多くの物を生産し所得を多くする。それが人々の幸せに繋がった時代もあったが、今日の社会では物は溢れている。物だけでは人は幸せになることは出来ない。一人一人が学び、精神的に向上することを今ここで考えなければならない。時の流れとともに経済も発展し、人間も発展していくということを、もっと各人が意識しなければならない。人間とは一体何なのか。何を求めて生きているのか。このような人間についての根源的な問いに答えを出し、それと矛盾しないように経済の問題にも答えを出していかなければならない。

本稿は、労働について、拙稿、馬田 [10] で展開された観点から、労働の本質を探る試みである。人間の心は顕在意識と潜在意識に分けられ、潜在意識の奥底に本来の自己がある。本来の労働とは、人が本来持っている

能力を現実化させていく労働である。人間は様々な能力を潜在的に持っている、その潜在能力を労働の現場で一つ一つ現実化させていくとき、人は真に豊かに生きていくことが出来る。そのとき人は健康に生き、周りの人と心からの信頼関係を結んでいけるし、周りの自然と調和した愛に溢れた生活をしていくことが出来る。そのような労働を、ここでは「プロセスを進める労働」と呼んでいる。現実の労働が「プロセスを進める労働」になっているかどうか、労働の実態調査を基に分析すると、そうっていない。その原因は、観念が邪魔をしているからである。従って、「プロセスを進める労働」を取り戻す為には、その観念に気づき、観念から自由になることを意識的に努力し続けることが最も重要になる。しかし、人間は社会経済システムの影響を大きく受ける。資本主義経済の中に、「プロセスを進める労働」をやりにくくさせている要因がある。それは、生活の基盤まで及んでいる貨幣のシンボル作用である。貨幣のシンボル作用を少なくした経済社会システムを構築することによって、「プロセスを進める労働」をより容易に取り戻すことが出来る。

本稿でいう「プロセスを進める労働」はマルクスが理想としたそれとよく似ている。マルクスとは次の諸点で異なっている。第一に、マルクスが心理的な面を軽視したのに対して、我々は心理的な面を重要視している。次に、マルクスが、本来の労働と疎外された労働の二種類の労働を考えていたのに対して、我々はマルクスの言う本来の労働とそれに至る労働を「プロセスを進める労働」として捉えている。そして、現実の労働が「プロセスを進める労働」になっているかどうかを、労働しているときの心身の状態で判断できる手掛かりを与えたことである。疎外された労働から本来の労働に一朝一夕でなるわけがない。日々の労働の中から、本来の労働に進んでいかなければならない。そのための手掛かりを与えたところに本稿の特徴の一つがある。

II 働くということ

働くということはどういうことであるか。新古典派の経済学によれば、それは消費財を手に入れるための手段である。労働者は、働くことによって得られる賃金、その賃金で得られる消費財に効用を持っている。しかし、労働そのものは負の効用しかもたらさない。労働はできれば避けたいものであり、労働するよりも余暇の時間が増えた方が望ましい。労働には、生活のための手段といった側面があることを否定しないし、現実の労働は大部分このようなものであろう。しかしながら、労働の全てがそのような労働ではないし、また、そのような労働であってはいけないと思う。

では、労働とは、本来の労働とはいったい何であろうか。このことに答えるためには、人間とは何かということから始めなければならない。それは何故かといえば、人間を置き去りにして議論をしていると問題の真の解決は得られないからである。豊かさを求めての労働のはずなのに働きすぎて過労死をしてしまう。この根本的な原因の一つは大切なものを見失っていたからである。人間とは何か、何故働くのかということについての問いかけが十分になされていないと真の解決はありえない。ここで、我々の人間観について最小限必要なことを述べておこうと思う。これが、我々が様々なことを論じるときの基礎になる。

第一に、人間はこの世に生まれてくる必然性があり、この世で果たすべき使命をもって生まれてくる。つまり、この世で果たすべき役割がある。

第二に人間の心の構造は図1のような階層構造をしている。顕在意識は心の10%以下であるといわれている。潜在意識は、個人的無意識、家庭的無意識、社会的無意識、文化的無意識、集合無意識、本来の自己に分けられる。そして、人が本来持っている能力を開花させ、本来の自己で生きるのが真に豊かな生き方である。

第三に、本来の自己は、個人が持つ本来的な能力で、その能力を開花さ

せることはユニークな自己の完成につながる。それはまた個性的であるとともに普遍的である。「本来の自己」で生きたとき、周りの人や自然との一体感を感じることが出来る。このとき人と自然が調和して生活することが出来る。

第四に、人は無意識の領域に様々な観念をもち、この観念にしたがって生きかたを決めている。現実が生じることは、全てこの観念の現れである。観念は生まれ育った環境によって人様々である。

第五に、人間には意識している、意識がとんでいたという意味での「意識」があるが、生活の中でこの「意識」を十分に働かせている人は殆どいない。多くの人は無意識の中に形成された観念にしたがって、無意識のうちに振る舞っている。

第六に、社会的無意識、文化的無意識の中の観念が表象し、記号になったものをシンボルと呼ぶ。人はシンボルを意識的に追い求めようとする。資本主義社会のシンボルは貨幣である。

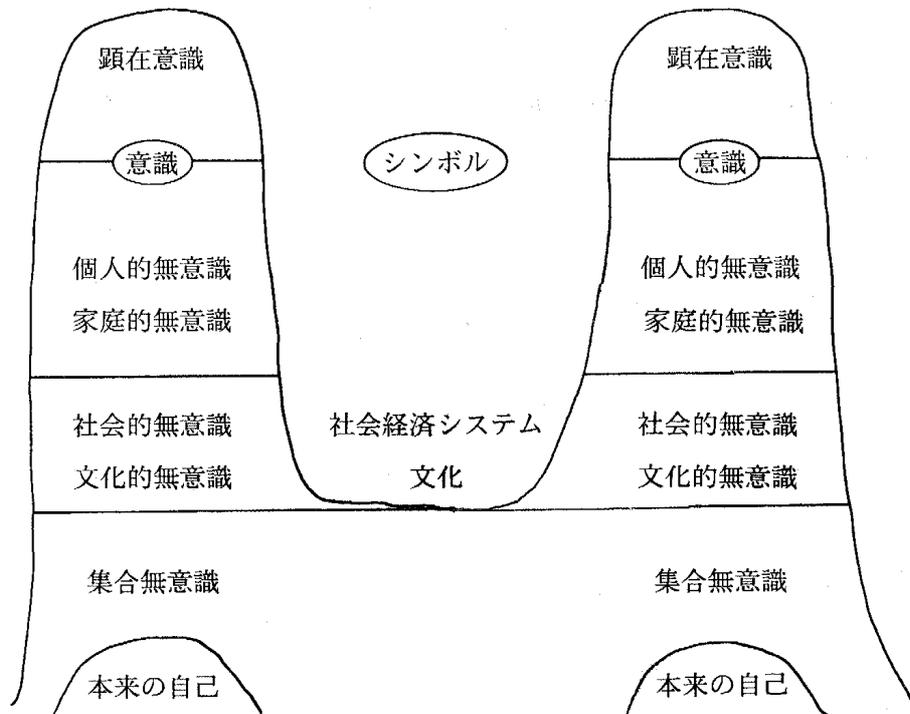


図1 心の構造

以上人間の心の構造について説明してきた。人は誰でも超一流になる何かの素晴らしい才能を持っている。しかし、その才能は生まれたときは潜在的に持っているだけでまだ現実のものになっていない。もって生まれた能力を十二分に全うすると人は心の底から満足し、満ち足りた気持ちになる。だが、例えば金もうけのように、単なるエゴを満足させた場合は、もっとももっとと追い求め、心から満足感を感じることはない。それが死を早める結果になる。

この心の構造から労働とは何か考えてみると、労働とは、自分の行動を規定している観念から自由になり、人が本来持っている能力を開花させていく行為ということができよう。その潜在的に持っている能力を労働の過程の中で現実のものとしていくのが本来の労働のあり方であると思う。本来の労働を行っているときには本人が心から満足し健康であるばかりでなく、周りの雰囲気も明るく、暖かくなる。本来の労働をしている人のみが人々に愛と希望と夢を与えることが出来る。そのような労働をここでは「プロセスを進める労働」と呼ぶことにする。プロセスが進むという意味は、人は生まれながらに本来進むべき道、或いは方向性をもっていて、その道に沿って進んでいるという意味である。また、潜在的に持っている能力が一つ一つ現実のものになっていくという意味である。この「プロセスを進める労働」についてももう少し詳しく述べていくことにする。

それは、第一に「自己実現の労働」という側面を持っている。自分は一体だれであるのか。何処から来たのか。何処に行くのか。なぜこの世に生まれてきたのか。この世で何を全うしていくのか。といった様々な自分自身に対する問いかけをし、その答えを求め、答えを出し、その答えを自分のものとしながら生きていくのが人間の生き様であると思う。自分がやりたいこと、常識では不可能と思えることにチャレンジし、それを実現していく。それも喜び楽しみながら、ワクワクしながら実現していく。昨日出来なかったことが今日出来るようになり、昨日分からなかったことが今日分かるようになる。このことによって、それまでに分からなかった新しい

自分に常に出会い、自己発見していく。自己発見・自己実現を続けていくと、自分が生きる道はこれだと思える仕事、いわゆる「天職」に出会う。

「天職」に出会った時、自分自身の能力を最大限に活かすことが出来る。

第二に、それは「対象化の労働」という側面を持っている。というより、「自己実現の労働」は「対象化の労働」であるということが出来る。自分の心にイメージされたものを現実のものにする。この自分がイメージしたものを現実のものにしていくという能力が他の動物には見られない人間固有の能力の一つではないだろうか。だとすれば、このような労働を行っているときのみが真に人間らしい労働だと言うことが出来よう。自分の中にあるものを現実の物として、形ある物として自分の外に創り出すという意味で「対象化の労働」ということが出来る。目に見えて、身体で感じる事が出来るものを創り出す行為であり、創り出しているということを五感を通して実感できる行為である。人が何かを創り出すときは、本能のままに作っている訳ではない。何かを創るというときは、創り出すものが、創り始める前からその人の心の中にイメージされている。そのイメージされたものが現実にかたちとなって現れてくる。人はだれでもイメージしたものを現実化させる能力を持っている。逆にいえば、現実化されて現れてくるものは全てイメージされたものといってもよい。心の中にある良いものも悪いものも全て出てくる。だから、「対象化の労働」が全て「プロセスを進める労働」といえばそうではない。「プロセスを進める労働」とは、潜在的に持っている能力を一つずつ現実化させていく労働のことである。人の心の中には「観念」もあり、「本来の自己」もある。「対象化の労働」といった場合には、「観念」が現実の形をもって表れようと、「本来の自己」が現実の形をもって表れようと区別はしない。しかし、「プロセスを進める労働」ではこの区別がとても重要になる。「プロセスを進める労働」とは、「観念」が次第に取り払われて、「本来の自己」がしだいに現実化されていく労働か、或いは、「本来の自己」が成長しながら現実化されていく労働である。そして、「プロセスを進める労働」には終わりはない。何故なら、「本

来の自己」のもつ潜在能力は無限だからである。

このことを絵を描くことを例にして説明すると次のようになる。絵を描くという例では、それは全て「対象化の労働」であるが、絵を描く度に、絵がどんどんよくなっていく場合に限って「プロセスを進める労働」という。絵を描くとき、例えばりんごを描くとき、りんごをうまく描くことが出来ない。そこにりんごがあり、目に見えたとおりりんごを描けばいいのだけれども、出来た絵はそこにあるりんごとは似ても似つかない。見えたままに描くことが出来ない。これは何故かといえば、「観念」に捕らわれているからである。りんごは赤いもの、丸いもの等々といった観念で描こうとして現実のりんごをよく見ていないからである。絵を描く訓練を続けていくと、だんだん上手に絵を描くことが出来るようになってくる。描く絵がだんだんそこにある実物のりんごに似てくる。そして写真でもとったのかと思えるくらいに実物のりんごそっくりに描くことが出来るようになってくる。これは、次第に自分の「観念」に捕らわれなくなり、「観念」から自由になってありのままのそこにあるりんごを見て絵を描くようになったからである。現実に見ているりんごは、丸くなくて少し細長いかもしれないし、丸くなくてちょっとゆがんでいるかもしれない。りんごも一つずつ個性があり、一つ一つ違っている。その違いが、「観念」から自由になり、対象をありのままに見ることが出来るようになったとき、見えてくる。さらに絵を描き続けたとき、そこに描かれるりんごはもはやただのりんごではない。画家の「本来の自己」が現実化したときりんごはその画家にしか描けないようになりんごである。デフォルメされて抽象化されて描かれるかもしれないし、実物以上においしそうな存在感をもって描かれるかもしれない。さらに絵を描き続けると、絵を描くときに、絵を描く対象が必要なくなるかもしれない。何者にも捕らわれない自由な心で、心の奥底からイメージがどんどん湧き出てくる。その人らしい、その人でしか描けない、人を感動させずにはおかない愛に溢れたイメージが湧き出てきて、それがそのまま描かれていく。

単なる対象化の労働は「観念」のイメージ化であり、「観念」の現実化である。「観念」は育てられる過程で両親その他の人々から与えられたものであり、自分以外の人々の見方であり、考え方である。したがって、個人が自由に創造したものではなくて、他の人々に従属して創り出したものであるということが出来る。人が自由に何事にも捕らわれないで創造するということは、「本来の自己」からのイメージであり、「本来の自己」の現実化である。単なる「対象化の労働」と「プロセスを進める労働」を図示すれば、図2、図3のようになろう。



図2 単なる対象化の労働

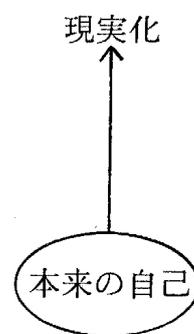


図3 「プロセスを進める労働」

従来の労働論で言われていた「対象化の労働」と「プロセスを進める労働」との違いは次のようである。従来の対象化の労働論では、「観念」からの対象化と「本来の自己」からの対象化を明確に区別していない。しかし、疎外された労働と本来の労働に労働を二分化して対象化の労働論を論じているとき、我々の言う「本来の自己」からの対象化を「対象化の労働」と呼んでいるようである。「対象化の労働」をユートピアとして論じているときには、明らかに「本来の自己」からの対象化を対象化の労働論は論じている。ここで言う「プロセスを進める労働」は、本来の自己からの対象化の労働と、それに至る労働の両方を含んでいる。現実の人間は様々な観念に捕らわれている。その観念の一つずつ気づき、それから一つずつ自由になっていく。その過程で「本来の自己」にだんだん近づいていく。自分が本当にやりたいこと、本当に創りたいものが何かだんだん分かっていく。

そのプロセスを進めると、「本来の自己」に出会い、自分が本当にやりたいことをやり、心の底から湧き上がるイメージを創り出していく。そのイメージは、まさに「天職」としか言えないようなイメージである。このように現実の人間、現実の労働から出発し、人が持っている潜在能力が一つずつ現実化していくところを捉えていくところに、従来の対象化の労働論とプロセスを進める労働論の違いがある。従来の対象化の労働論は、労働を疎外された労働と本来の労働に二分化していた。そして、それを区別する「観念」について十分な注意を払っていなかったため、本来の労働を取り戻すための十分な方法を見つけ出すことが出来ず、ユートピア論に終わっていたと思われる。

「プロセスを進める労働」がもつ第三の側面は、「アソシエーションの労働」という側面である。それは労働を通して人と人とが交流するという側面である。人間は社会的な動物であり、一人だけで生きていくことは出来ない。だから人はだれかと交流することを求める。ここで重要なのは、人と人とが交流するときには様々な交流のレベルがあるということである。「おはようございます」、「いい天気ですね」といった儀礼的な会話のレベル。「わたしは社長です」「私は母親です」といった社会的役割のレベル。自分の気持ちを分かち合う親和のレベル。このようにいろいろな意識レベルでの交流がある。図示すると、図4のようになる。

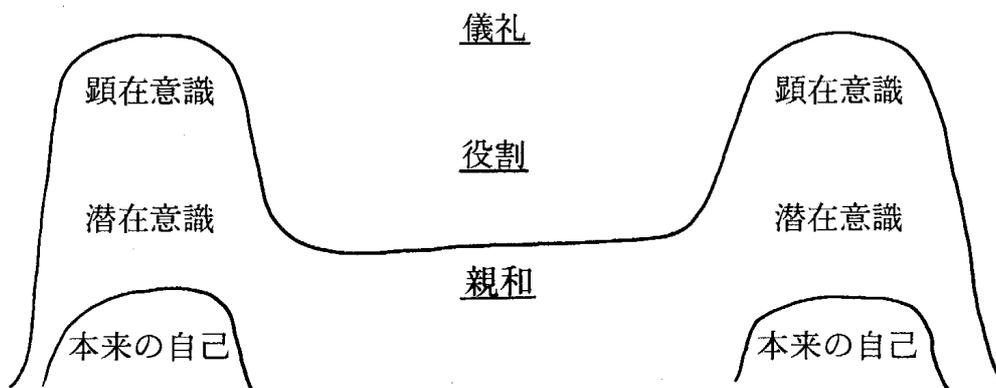


図 4

今日の社会ではっきりしているのは、人と人との間に距離をおいて、当たり障りのない付き合いをしているのが多いということである。お互いの意見の違いをつきつめたり、言いたいことをはっきり言うと人間関係がこじれてしまうのではないかと恐れて、つかず離れずのな—な—で曖昧な関係が続けていることが多い。或いは、ある固定した「観念」で人を見てしまい、その人を深く理解しようとしなないことも多い。

「プロセスを進める労働」は、労働の過程が交流のレベルを深めていくような労働である。労働の過程を通して、より多くの人とより深いレベルで交流することが出来るようになってくる。

このことを心理学的に説明すると、次のようになる。つまり、労働の過程においてとらわれていた「観念」から自由になり、意識のレベルがどんどん深くなっていくということである。今まで見えなかったものが見え、感じられなかったことが感じられるようになってくる。人と共に何かをする場合、人を正面から受け入れるということが出来ないとうまくいかない。こういう人はいい、ああいう人はいけないといった観念が強いと、人を受け入れるということがうまくいかない。「プロセスを進める労働」の過程では、人に対する観念が徐々に取り払われ、意識が深化することによって、人を多面的に見ることが出来るようになり、今まで受け入れられなかった人が受け入れられるようになってくる。また、交流のレベルが深まってもいく。プロセスがどんどん進んでいくと最終的には、何かを成したとき、それはみんなでやったとしかいいようのない状態がやって来る。それは何事にも代えられない快感である。ハートとハートが触れ合い、人と人がダイレクトに言葉を越えて理解し合い、解放され、分かり合い、安らぎ安心する気持ちが生まれるようになってくる。そこには、この部分はあなたの労働分、あの部分は私の労働分といった区別さえない。

このときの仕事は「天職」である。本来の自己の方向性が一致している人どうしが集ることによって、共に目標を目指して努力し、達成した時に心の底から喜びを分かち合うことが出来る。

従来の「アソシエーションの労働」と「プロセスを進める労働」との違いは次のようである。つまり、アソシエーションの労働論では自由に行動する人間の交流を理想としているが、人間の交流に様々なレベルがあることを意識していない。人々の交流を疎外する要因としての「観念」の働きを十分に理解していない。人の振る舞いを縛っている「観念」から少しずつ自由になることによって最終的に自由な人間の深いレベルの交流が達成されるのを理解しないとき、アソシエーションの労働論は単なるユートピアの労働論に終わってしまう。

このように見てくると、「プロセスを進める労働」の行き着く先は、「天職」であり、「本来の自己」の「対象化の労働」であり、「本来の自己」どうしの「アソシエーションの労働」である。人が真に豊かに生きるには「本来の自己」のもつ能力を現実のものにしながら生きていく場合である。「本来の自己」で生き、本当に自分が創りたいものを創り上げたとき、それが本当の意味で「対象化の労働」となる。「本来の自己」で何かを創り上げたとき、その作品と自分との区別がなくなる。「本来の自己」のイメージの投影がそこにあり、作品は自分であり、自分が作品である。この考えから、労働が「本来の自己」として自然を対象になされたとき、本当の意味で自然との一体感を感じることが出来る。また、「本来の自己」で生きる者達が集まって一緒になって何かを成し遂げたとき、それは本当の意味で「アソシエーションの労働」である。人と人との間にある観念の壁が取り払われ、人と人との言葉を超えて理解し合い分かり合い、ダイレクトにつながり、全身で一体感を感じることが出来る。

III 現実の労働

二節で、労働とは本来どういうものかということについて論じた。そこで述べた本来の労働とは、「プロセスを進める労働」であった。現実の労働が「プロセスを進める労働」になっているかどうか判断することが重要な

問題になる。この節では、充実感をともなって働くことが、心と身体にどのような変化をもたらすかということについて、またその時、奇跡や癒しをもたらされることについて説明することにする。

人間は、「本来の自己」で生きるのがもっとも自然な生き方である。知りたいことを知り、出来るようになりたいことを出来るようになり、泣きたいときに泣き、笑いたいときに笑う。本来持っている、思考力、行動力、感情表現力、感覚力を最大限に発揮し、「本来の自己」が欲求するままに生じることを生じさせる。それが最も自然な生き方である。自分が好きで、自分に合ったことに対しては、おしげもなく自分の時間を楽にさくことが出来る。それはとても簡単なことである。だから、今問題になっている日本の長時間労働も、もしそれが「プロセスを進める労働」になっているならば、問題にならない。

そのように自然な生き方をした場合、どういうことが心と体に生じるかといえば、まず健康であるということである。人は誰でも、大なり小なり何かに熱中した経験があると思う。食事を忘れていたり、寝るのを忘れていつのまにか夜が明けてしまっていたという経験が。そのようなときには、食べていないのに、また、十分睡眠をとっていないのに、何故か体は元気である。それは何故かといえば「気」が流れているからである。人間の体には神経のように解剖すれば目に見える系と、東洋医学で言う、「経絡」、「気」、「経穴」といった目に見えない系がある。この目に見えない系を「気」が流れているが、この「気」の流れが健康に重要な影響を及ぼしている。つまり、「気」の流れが悪くなると血液の流れが悪くなり、血液の流れが悪くなると病気になる。まさに「気」が「病む」のである。

この「気」の流れと「本来の自己」は密接な関係を持っている。つまり、「本来の自己」から湧き上がる欲求にしたがって生きているときには「気」がよく流れるようになるのである。そして「プロセスを進める労働」は、「本来の自己」のもつ能力が開花していくような労働であるので、「プロセスを進める労働」をやっている場合は、「気」がよく流れるようになるため、

心と身体が癒され、病気にならないのである。病気にならないまでも、いくら寝てもなかなか疲れがとれないといった場合は、「本来の自己」で生きていない、或いは「プロセスを進める労働」をやっていないということが考えられる。

以上が「プロセスを進める労働」と体の関係であるが、さらにそれは、心理状態とも密接な関係を持っている。つまり、労働が「プロセスを進める労働」になっている場合は強い不安やストレスはないが、そうになっていない場合は、心理的な抑圧による強い不安やストレスが生じてくる。何かをやりたいという欲求を抑えて、やらなければならないことを無理してやると心理的な抑圧を自ら起こす。やりたいというエネルギーとそれを抑える、やらなければならないというエネルギーがぶつかり葛藤を起こす。図示すると図5。

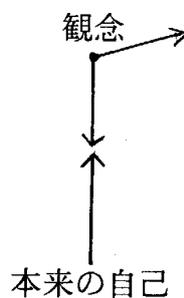


図 5

本来の自己は、例えば10の大きさに働いているが、それを打ち消すために10の力を使い、さらに意識的に10の力で命令されたことをやる。全部で30の力を使っているのに10の力しか現実のものになっていない。それどころか本来の自己からのエネルギーとそれを打ち消すエネルギーが葛藤を起こし、ストレスを引き起こすのである。

この葛藤がストレスとなって病気を引き起こすこともあるが、イライラや不平不満となって何らかの行動に変わり、対人関係を悪くすることも多

い。人は、自分がやっていることがうまくいっていると機嫌がよく、他人に対しても寛容になるものであるが、うまくいってないと相手のちょっとしたことが気に入らなくて怒りっぽくなったりする。例えば、周りの人や家族に対して当たり散らしたり、部下や自分より地位の低い人をいじめたりいびったり、或いは周りの環境を破壊したりする。

また、「プロセスを進める労働」を続けていると、「本来の自己」つまり、自己のもつ潜在能力が十二分に発揮され、不可能と思ったことが実現し、奇跡としかいいようのないことが起ることもある。

このように現実の労働が、「プロセスを進める労働」になっているか、なっていないかは、現実の労働現場で病気、疲労が多いかどうか、或いは強い不安ストレスが多いかどうかで判断することが出来る。そこで、現実の統計データをみってみる。なお、以下のデータは全て「労働者の健康状態の実態」[8]に依る。

これらを見ると、実労働時間が増えるにつれて、身体や神経の疲労を感じる労働者の割合が増えている。また、強い不安、悩み、ストレスを感じる労働者の割合も増えている。この面から見ても、多くの人が「プロセスを進める労働」を行っていないことが分る。

そして、表1を見ると、疲れるという人の割合が、昭和57年の64.6%から、昭和62年の67.3%へと増えている。また、表3を見ると、疲れるという人の割合が、昭和57年の70.7%から、昭和62年の72.2%へと増えている。さらに、表5を見ると、翌朝に前日の疲れを持ちこす人の割合が、昭和57年の47.2%から、昭和62年の51.8%へと増えている。このままいくと、事態はますます悪くなることが予測される。

IV 本来の労働を取り戻すために

III節で、現実の労働がプロセスを進める労働になっていないことが明らかにされた。この節では、どの様にすればプロセスを進める労働を取り戻

表 1 ふだんの仕事での身体の疲労の状況別割合 (%)

区 分	常用労働者計	とても 疲れる	や や 疲れる	あまり 疲れない	まったく 疲れない	疲れているともいえないともいえない	不 明
昭和57年	100.0	17.1	47.5	26.3	2.1	7.0	-
62年	100.0	14.9	52.4	25.6	1.9	5.0	0.2

表 2 ふだんの仕事での身体の疲労の状況別割合 (%)

区 分	常用労働者計	とても 疲れる	や や 疲れる	あまり 疲れない	まったく 疲れない	疲れているともいえないともいえない	不 明
(実労働時間)							
6時間未満	100.0	12.4	39.2	35.0	1.9	11.2	0.2
6～7時間未満	100.0	8.8	48.6	33.6	0.8	7.2	1.1
7～8時間未満	100.0	13.5	46.2	31.4	3.4	5.4	0.1
8～9時間未満	100.0	12.1	53.6	26.9	2.4	4.7	0.2
9～10時間未満	100.0	17.9	56.9	21.0	0.3	4.0	0.1
10時間以上	100.0	23.6	60.2	11.3	0.6	4.2	0.2

表 3 ふだんの仕事での神経の疲労の状況別割合 (%)

区 分	常用労働者計	とても 疲れる	や や 疲れる	あまり 疲れない	まったく 疲れない	疲れているともいえないともいえない	不 明
昭和57年	100.0	13.8	56.9	20.2	1.4	7.8	-
62年	100.0	15.1	57.1	20.1	1.6	4.1	1.9

表 4 ふだんの仕事での神経の疲労の状況別割合 (%)

区 分	常用労働者計	とても 疲れる	や や 疲れる	あまり 疲れない	まったく 疲れない	疲れているともいえないともいえない	不 明
(実労働時間)							
6時間未満	100.0	10.7	36.5	36.2	0.7	10.4	5.5
6～7時間未満	100.0	5.1	51.2	27.9	3.0	6.3	6.6
7～8時間未満	100.0	11.4	53.9	25.5	2.9	4.6	1.7
8～9時間未満	100.0	13.2	58.7	20.4	1.6	4.6	1.5
9～10時間未満	100.0	17.5	63.1	14.8	0.4	2.4	1.7
10時間以上	100.0	29.8	57.6	8.7	0.5	2.1	1.3

表5 疲労の回復状況別労働者の割合 (%)

区 分	常用労働者 計	一晩睡眠 をとれば大 体回復す る	翌朝に前 日の疲れ を持ちこ すことがと きどきある	翌朝に前 日の疲れ を持ちこ すことがよ くある	翌朝に前 日の疲れ を持ちこ すことがい つもある	不 明
昭和57年	100.0	52.7	36.9	8.0	2.3	0.1
62年	100.0	48.0	38.7	10.3	2.8	0.2

表6 疲労の回復状況別労働者の割合 (%)

実労働時間	常用労働者 計	一晩睡眠 をとれば大 体回復す る	翌朝に前 日の疲れ を持ちこ すことがと きどきある	翌朝に前 日の疲れ を持ちこ すことがよ くある	翌朝に前 日の疲れ を持ちこ すことがい つもある	不 明
6時間未満	100.0	62.4	29.6	7.2	0.8	-
6～7時間未満	100.0	57.2	35.2	6.2	0.2	1.2
7～8時間未満	100.0	53.1	36.8	8.2	1.9	0.0
8～9時間未満	100.0	50.1	38.8	8.6	2.5	0.1
9～10時間未満	100.0	42.6	40.1	13.8	3.5	0.0
10時間以上	100.0	32.0	44.0	17.2	5.9	0.9

表7 工作上、職業生活に関することでの強い不安、悩み、ストレスの有無別労働者の割合 (%)

区 分	常用労働者 計	強い不安、悩み、 ストレス有	強い不安、悩み、 ストレス無
(実労働時間)			
6時間未満	100.0	31.4	68.6
6～7時間未満	100.0	37.9	62.1
7～8時間未満	100.0	48.9	51.1
8～9時間未満	100.0	53.0	47.0
9～10時間未満	100.0	63.7	36.3
10時間以上	100.0	72.4	27.6

すことが出来るかということについて述べる。その為にはまず、原因を明らかにしなければならない。

表 8 家庭生活に関することでの大きな心配ごと、悩みごとの有無別労働者の割合 (%)

区 分	常用労働者計	大きな心配ごと、悩みごと有	大きな心配ごと、悩みごと無
(実労時間)			
6 時 間 未 満	100.0	34.3	65.7
6 ～ 7 時 間 未 満	100.0	37.4	62.6
7 ～ 8 時 間 未 満	100.0	40.7	59.3
8 ～ 9 時 間 未 満	100.0	39.4	60.6
9 ～ 10 時 間 未 満	100.0	44.7	53.3
10 時 間 以 上	100.0	50.9	49.1

原因は、1節で述べた意識構造のモデルを使えば簡単で、潜在意識の中に埋め込まれた観念にある。この観念に縛られて、本来の自己、つまり心の奥から湧き上がる欲求が分らずに労働をしているところに、プロセスを進める労働が出来ていない原因がある。したがって、プロセスを進める労働を取り戻すためには、それぞれの無意識のレベルの観念に気づき、それから自由にならなければならない。

そこでまず重要になるのが、個人の意識的な努力である。自分自身の心や身体の状態、或いは周りで起っていることに敏感になる。そして、本来の自己の、つまり心の奥から湧きおこる欲求を感じ取り、その欲求で生きるということを決め、意識的に努力しなければならない。自己を縛っている観念に気づき観念から自由になる。これが何よりも大切である。これがないかぎり、どんなに外的な条件を整えてもプロセスを進める労働を取りもどすことは出来ない。逆に、この意思が強ければ、どの様な外的条件の下でもプロセスを進める労働を取り戻すことは出来る。

このように、プロセスを進める労働をとり戻せるかどうかは、基本的に個人の意識的な努力にかかっている。まわりの環境はそれを援助するだけである。マルクスは、環境を変えることによって、人の意識が変わるといった。これは必ずしも間違いではないが、十分ではない。社会経済システム

を、共有のシステムに変えたら、自動的に共同体意識が生まれてくるわけではない。個人的無意識層に利己心が組込まれていたら、利己心に従って行動する。つまり、フリーライダーの問題が生じてくることになる。従って、この場合には、利己心の代りに共同体意識を取り戻しておく必要がある。

プロセスを進める労働を取り戻す為には、社会経済システムは二次的な重要性しか持たないが、それが与える影響が大きいので、プロセスを進めやすい社会経済システムを創ることは重要になってくる。現代の資本主義経済がプロセスを進める労働を進める上で、マイナスになっている原因は、資本主義社会が、経済成長なくしては持続できないところにある。需要が飽和したからといって生産を止めるわけにはいかない。生産を続けなければ、失業が増えて社会は不安定になる。

資本主義経済が経済成長なくして持続できない原因をさらに探っていくと、貨幣のシンボル作用が、生活の基本的なところにも及んでいることにある。衣食住に最低限必要とされるものさえ貨幣がなければ手に入らないのである。労働力しか売ることがない労働者は、労働力を売らないと食べていくことが出来ない。逆に、貨幣があれば大部分の物を手に入れることが出来るので、貨幣で全てのものが手に入ると思い込み、自分が本当に欲しいものが分らないまま盲目的に貨幣を追い求めてしまう。企業も金がなければ物を作ることが出来ない。さらに、好景気はいつまでも続くわけではない。稼げる時に稼いでおかなければならない。労働者を低賃金で長時間働かせるようにする。或いは生産性を上げるために、分業を極限まで押し進めたりする。大切なのは、より多くの貨幣を手に入れることであって、人のプロセスを進めることではない。

この生活の基盤までも及んでいる貨幣のシンボル作用が根本的な原因となり、現実の労働がプロセスを進める労働になっていないと考えられる。したがって、貨幣のシンボル作用と生活の基盤を切り離し、誰でも食料は、食べたいときに食べたいだけ食べられ、なおかつやりたい仕事はやれるよ

うな社会経済システムを創ると、「プロセスを進める労働」を実現しやすいと考えられる。

そのような社会経済システムの一つの在り方として、農林水産業者の共同体のネットワークをベースにした、持続可能な工業社会が考えられる。まず、自然の理に適った農林水産業を行い、食料は自給する。工業製品やサービス財は、社会的に必要なだけ生産し、需要が飽和したら、農業生産に戻るのである。なお、工業は自然の理に適った方法でしなければならない。以下では簡単に、食料が農産物で足りている場合にしばって話を進める。

まず第一に、農業生産者が集まって、共同体を創り、そこで心と心をベースにした経済を行う。物と物とを交換するのではなく、生産物を分かち合うのである。この生産物を分かちあう意識、感覚を取り戻すことはプロセスを進める労働を取り戻す上での重要な点である。生産物を分かちあうことによって人と人との交流、協働を進めることが出来る。このためには、同じ目標を持ち、共に物を作り、それを分かち合う人々が集る必要がある。共に食事をし、お互いの観念や文化を分かり合う。お互いの顔が見える人どうしでそれを行うのである。その中から心と心の交流も生まれてくる。

共同体で、恒常的に余剰生産物ができるようになったら次に、その共同体のネットワークを創る。共同体で生産物の余剰があれば、他の共同体に供給し、不足すれば他の共同体から供給を受ける。ネットワーク内で恒常的に余剰生産物ができるようになれば、余剰生産物を商品として売る。また、共同体外の人々は、自分の身近なところにある共同体と契約を結ぶ。その契約は、毎月一定額を支払うことにより、生活に必要な農産物を供給してもらうという契約である。そして、契約者が失業すれば、お金を支払う代わりにそこで働くことにより、農産物を手に入れることが出来る。

資本主義経済は、農業の余剰人員を工業生産の労働者にふり向けることにより、経済発展を遂げてきた。しかし、現在のシステムでは、失業すると、労働力しか売ることがない労働者はどうすることも出来ないのである。

とにかく売れないと仕方がないから、社会的に不必要な物まで無理やり生産し、無理やり消費者に買わせている。そこで、需要が飽和し、売れなくなり、失業したら、農業生産に戻るのである。十分に食べ、自然と触れ合い、人と人との心の交流も取り戻す。そのような生活の中から、じっくりと自分の心に問いかけ、自分の心の底から本当に創りあげたいものが出てきたら、共同体を出て新たに企業を創り、生産をすればいいのである。

企業も、「本来の自己」のもつ方向性が一致した者同志が集った小規模の共同経営が多くなると思われる。食べていけない不安から、無理してやりたくもない仕事をやる必要はない。それに、大量生産、大量消費の時代は終わっている。自然の中の共同体で働くことにより、心を込めてものを創るという感覚を取り戻している。創った人の心が伝わる物を、一緒に創りたい人が集まって、小規模の生産が行われる。

企業内の労働がプロセスを進める労働になるための条件の一つは、「本来の自己」のもつ方向性を等しくする者同志が一緒になって労働をすることである。同じ方向性を持った者が集まると一人でやる以上に大きな力になるし、一人では解決できなかったことが案外楽に解決されたり、乗り越えることが出来なかった壁が、お互いに励まし合い力を合わせることによって乗り越えられたりする。そういった過程を通して人と人との結びつきも深まっていくのである。ところが「本来の自己」のもつ方向性が違う者同志が集まると、一緒に何かやるためには観念を共有しなくてはならない。自分が本当にやりたいことを抑えて、ある共通な観念のもとに集まって何かをしなくてはならない。そのような場合でもなにがしかの交流はあるが、そのレベルは深まることはない。

このような社会経済システムにすると、国民が十分食べていけるだけの食料が保証され、経済成長がなくても持続可能な産業社会が実現される。本当に社会的に必要とされるものを、本当に創りたい人が集って企業を創り生産する。そして、需要が飽和すれば、生産を止めて農業生産に戻ればいいのである。このことによって、「プロセスを進める労働」を取り戻すこ

とはより容易になると思われる。

V 終わりに

本稿では、労働とは本来どういうものであるかということについて考察してきた。より良い人生を送るために、より良い人生を見いだすために、そして生きていること、生かされていることを実感するためには、本来の労働を考えることが重要である。それは人生の大部分の時間が労働に費やされ、どういう労働をしているかで、どういう人生が決まるといっても過言ではないからである。本稿で得られた結論は労働の本来の在り方は、「プロセスを進める労働」であるということであった。人が誰でも持っている潜在能力を、玉葱の皮を剥くように、一つ一つ現実化していく過程が本来の労働の在り方である。

現実の労働が「プロセスを進める労働」になっているかどうかを見てみると、殆どの場合そうになっていない。「プロセスを進める労働」になっているかどうかは健康に働いているかどうか、強い不安やストレスはないか、職場の人間関係が良いかどうかなど自分の身の周りで起こっている出来事で判断することが出来る。

現実の殆どの労働が「プロセスを進める労働」になっていないが、その原因は、人の無意識の中に形成された観念にある。自分自身の心の奥から湧き上がってくる感情に注意深くなり、その感情に従って生きることを意識的に努力し続けると、プロセスを進める労働を取り戻すことが出来る。

プロセスを進める労働を取り戻すためには、個人の意識的な努力が最も大切であるが、プロセスを進めやすい社会経済システムを創ることも重要である。そのための新しい社会経済システムとして、農業生産者の共同体のネットワークをベースとした、持続可能な工業社会が考えられる。食べ物の心配がなく、経済成長がなくても持続可能な社会を創ることにより、人はよりプロセスを進めやすくなると思われる。

プロセスを進める労働を取り戻すための社会経済システムの詳細な研究や、人間の進化と経済発展の関係等は、今後の研究の大きな課題の一つである。

参考文献

- [1] アップルガス, J., 川喜多喬訳, 「ワーキング・フリー」, 有斐閣, 1988年
- [2] 今村仁司, 「労働のオントロジー — フランス現代思想の底流 —」・頸草書房, 1981年
- [3] 過労死弁護団全国連絡会議, 「過労死!」・講談社, 1992年
- [4] マルクス, K. エンゲルス, F., 真下信一訳, 「ドイツ・イデオロギー」, 大月書店, 1965年
- [5] マルクス, K., 城塚登, 田中吉六訳, 「経済学・哲学草稿」, 岩波書店, 1964年
- [6] 中岡哲郎, 「人間と労働の未来」, 中央公論社, 1970年
- [7] ロバートソン, J., 小池和子訳, 「未来の仕事」・頸草書房, 1988年
- [8] 労働省政策調査部編, 「労働者の健康状態の実態」・労働法令協会, 1989年
- [9] 杉村芳美, 「脱近代の労働観」, ミネルヴァ書房, 1990年
- [10] 馬田哲次, 『経済学と心理学の統合を目指して—潜在能力からの接近』, 山口経済学雑誌・1992年, 第40巻第5・6号